
■ PCN だより**PCN Volume 63, Number 5 の紹介 (その1)**

PCN 編集委員会では、PCN が今まで以上に広く世界の精神医学雑誌として認知されるための方策を検討してきた。そして、海外エディトリアルボード (International Editorial Board) に総説執筆を依頼することになった。今回の 111 巻 10 号ではドイツ・ミュンヘン大学精神医学教室主任教授を勤める Hans-Jürgen Möller 教授にご寄稿いただいた。Hans-Jürgen Möller 教授は、現在進行している DSM-V と ICD-11 の改定作業に深く関与しておられる大家であり、現在の進行状況についての意見を総説としてまとめていただき、PCN Frontier Review として掲載することができた。今回は、PCN 63 巻 5 号に掲載された外国からの投稿である PCN Frontier Review 1 本、Review Article 2 本、Regular Article 5 本を紹介する。

PCN Frontier Review

Development of tendencies and potential of new classifications in psychiatry at the current state of knowledge

Hans-Jürgen Möller

Department of Psychiatry, Ludwig-Maximilians-University, Munich, Germany

DSM-V および ICD-11 の改定——新診断体系の動向・可能性と現時点での知識——

ICD-10 と DSM-IV の改定の必要性は、ここ 20 年間の神経生物学を中心とした知見の増加にあるが、たとえば神経遺伝学領域の知見は、精神医学診断体系の改定を必要とするに足るだけのものがあるのだろうか、また、そのような改定には十

分な意味が約束されているのであろうか。現在のところ DSM-V と ICD-11 とは、それぞれ別々の改定を目指しているが、このような過程では、病因論的仮説を排除した純粋に症候学的・ディメンジョナルな方向性が議論されている。ディメンジョナルアプローチへの変更は大きな変化であり、とりわけ DSM-V の Deconstructing Psychosis 作業部会においてこのような方向性が議論されている。このような新しいアプローチは、現在の ICD-10 や DSM-IV にもある程度とりいれられているが、精神疾患の病因病理に対する多くの論理的な前提仮説を避けることができ、精神医学の診断体系の信頼性を増加するであろうが、同時に、現在の分類体系が示唆している発症病理、治療、予後についての情報を大きく減少させることになる。またこのようなディメンジョナルアプローチは助けを求めて来院する患者のそれぞれを標準化された方法で評価することを必要とする。新しい体系では、それぞれの精神障害に見られるすべての症候を評価するマルチディメンジョナルな評価を必要とするのであろうが、このような点を考慮すると、極端な改定よりも注意深い変更のほうが適当と考えられる。

Review Article

1. Central nervous system effects of natural and synthetic glucocorticoids

P. Fietta, P. Fietta and G. Delsante

Psychiatry Department, Hospital and University of Parma, Parma, Italy

神経グルココルチコイドと合成グルココルチコイ

ドの中枢神経作用について

神経グルココルチコイド (NGC) は、脳をはじめとしてすべての器官や組織における身体ホメオスターシスを調節しており、その適応反応を司っている。合成グルココルチコイド (SGC) は治療目的で多くの疾患に対して処方されているが、その副作用 (AE) について中枢神経系 (CNN) の障害を含めて、十分に留意されていない。本論文では NGC および SGC の中枢神経系への作用について検討することを目的として、PubMed による文献検索を行った。コルチゾールは行動、認知、気分、ストレス反応に対する人生早期のプログラミングに極めて重要な役割を果たしている。高コルチゾール血症および SGC 投与は、脳内の特定部位の機能変化および時として構造的変化をもたらし、行動、精神、認知の障害を引き起こす。このような副作用は通常は用量と時間に依存しており、普通はプレドニン換算で 20 mg/日以下では少ないが、小児では起こりやすい。摂食、睡眠などの行動上の副作用は普通に見られ、精神的副作用はその重症度もさまざまで見られ、5~10% に認められる。躁状態は短期間の SGC 治療に多く、抑うつ状態は長期治療に見られることが多く、自殺念慮が認められる。認知の副作用は陳述記憶を特に障害する。生理的濃度の NGC は脳機能に必須であり、高コルチゾール血症あるいは SGC 治療は時間と用量に依存した副作用を惹起し、時間の経過とともに脳内の特定部位の構造変化を引き起こす。臨床家は、患者のコルチゾール値を、小児については特に注意深くモニターすることが必要である。

2. Atypical antipsychotics in the treatment of delirium

Vaios Peritogiannis, Ekaterini Stefanou, Charalampos Lixouriotis, Christos Gkogkos, Mand Dimitrios V. Rizos

Medical School, University of Ioannina, Livadia, Greece

せん妄治療における非定型抗精神病薬の使用について

せん妄は多くの臨床病態において見られる。非定型精神病薬はせん妄症状に対してよく使用されているが、その有用性について体系的には調べられていない。そこで、本論文ではせん妄治療に対する非定型抗精神病薬の有効性について検討した。文献検索は 1997~2008 年の MEDLINE, PsycINFO, EMBASE によりせん妄とすべての非定型精神病薬の名称をキーワードとして検索した 23 論文についてまとめた。そのうち 15 論文は一つの薬剤についての報告であり、4 論文は複数の薬剤についての報告であり、そのうちの一つは二重盲検であった。4 論文は後方視研究であり、その中には薬剤を比較した 3 論文が含まれていた。すべての報告で非定型抗精神病薬のせん妄に対する効果が報告されていたが、サンプルの不均一性と数の少なさ、異なる評価尺度、対照群のないことなどが限界としてあげられる。非定型抗精神病薬の効果は使用開始数日後から認められ、比較的小用量が用いられていた。非定型薬は十分に耐用性があるように思われるが、系統的な検討はなされていなかった。結論として、せん妄に対する非定型抗精神病薬は有用であり安全であるが、その証拠は限られており十分とは言えない。これまでのところ二重盲検のプラセボ対照研究がなされていないことから、十分にデザインされた研究が必要と考えられる。

Regular Article

1. Total antioxidant capacity and total oxidant status in patients with major depression: Impact of antidepressant treatment

Birgul Elbozan Cumurcu, Huseyin Ozyurt, Ilker Etikan, Suleyman Demir, and Rifat Karlidag
Departments of Psychiatry, Gaziosmanpasa University School of Medicine, Tokat, Turkey

大うつ病患者の抗酸化能とオキシダント値——抗うつ剤治療の影響——

【目的】大うつ病における抗酸化能 (TAC) と全オキシダント値 (TOS) の関係性を評価し、かつ抗うつ剤の影響について検討する。【方法】57名の大うつ病患者と40名の健常者について Erel の方法により血清 TAC と血清 TOS を測定した。患者群は抗うつ剤による治療後の効果を Montgomery-Asberg Depression Rating Scale (MADRS) により12週間評価した。【結果】大うつ病患者群の TOS と酸化ストレス指数 (OSI) は健常者より有意に高く TAC は有意に低かった。12週間の抗うつ剤による治療後では、治療前と比較して TOS と OSI は低下し、TAC は増加した。さらに、血清 TOS と OSI は重症度と比例しており ($r=0.584$, $P=0.0001$; $r=0.636$, $P=0.0001$), TAC は逆比例していた ($r=-0.553$, $P=0.0001$)。【結論】3か月の抗うつ剤治療は TAC の上昇と、TOS および OSI の低下をもたらす。

2. Effect of age and gender on schizotypal personality traits in the normal population
Emre Bora, MD and Leyla Baysan Arabaci
Melbourne Neuropsychiatry Centre, University of Melbourne, Melbourne, Victoria, Australia

一般人口における統合失調型パーソナリティ特性に対する年齢と性別の影響

【目的】これまでにも統合失調型パーソナリティ特性に対する年齢と性別の影響を示唆した報告はあるが、年齢幅が十分ではなかった。そこで本研究では統合失調型パーソナリティ特性に対する年齢と性別の影響を検討した。【方法】schizotypal personality questionnaire を用いて16~90歳の一般人口1024名を調査した。性別と年齢による影響を因子分析により検討した。【結果】男性は、陰性症状、解体症状で女性より高い得点であり、女性は、社会不安、奇妙な信念で高い得点であった。若齢者は、参照、奇妙な信念、異常な知覚、奇妙な行動、奇妙な言語において高い得点を示していた。年齢とともに統合失調型パ

ーソナリティ得点は緩やかに減少していたが、女性の解体症状の得点は青年期後期に特徴的であった。因子分析ではすべての年齢層において Raine の3因子モデルを支持していた。【結論】統合失調型パーソナリティ特性の経年変化には、青年期の心理変化や人生経験による社会的適応が関与している。

3. Childhood emotional abuse and dissociation in patients with conversion symptoms
Vedat Sar, Serkan Islam, and Erdiñç Öztürk
Clinical Psychotherapy Unit and Dissociative Disorders Program, Department of Psychiatry, Medical Faculty of Istanbul, University of Istanbul, Istanbul, Turkey

転換性障害患者における幼児期の虐待と解離

【目的】転換症状を呈する患者の幼児期の虐待と解離との関係性について検討した。【方法】転換症状を呈する32名の外来患者について Dissociative Experiences Scale, Somatoform Dissociation Questionnaire, Childhood Trauma Questionnaire, Spielberger Trait Anxiety Inventory, Clinician-Administered Dissociative State Scale, Dissociative Disorders Interview Schedule にて評価した。【結果】対象患者の46.9%がDSM-IVの解離性障害と診断された。解離性障害を有する転換性障害患者は境界性人格障害を伴うことが多かった。幼児期の体験については、情動的虐待のみが後になっての解離を予測していた。幼児期の体験のいずれも後になっての境界性人格障害を予測していなかった。【結論】境界性人格障害、解離、幼少時の情動的虐待は、転換性障害の一部分に認められる。解離症状は幼児期のトラウマと境界性人格障害とを結びつける要因である。

4. The associations between menopausal syndrome and depression during pre-, peri-, and postmenopausal period among Taiwanese

female aborigines

*Ju-Yu Yen, Mei-Sang Yang, Mei-Hua Wang,
Chien-Yu Lai, and Mao-So Fang*

Department of Psychiatry, Kaohsiung Municipal Hsiao-Kang Hospital, Taiwan

台湾女性の更年期における閉経症候群と抑うつ症状

【目的】台湾原住民において、閉経の前、中、後の閉経症状と抑うつ症状について調査した。【方法】40~60歳の台湾住民女性672名について、閉経前12カ月の月経血をもとにして、前、中、後とに区分した。閉経にともなう身体症状、抑うつ、健康感、家族のサポートを面接により評価した。【結果】閉経期はうつ病と関連しており、閉経期の女性におけるうつ病の有病率が高かった。うつ症状は閉経期身体症状の程度とも相関していた。さらに身体症状は、閉経前、中、後のいずれの時期においてもうつ症状と相関しており、性機能不全は閉経前の、血管運動症状は閉経後のうつ状態と相関していた。【結論】閉経期身体症状を訴えて来院する台湾住民女性においてはうつ病の有無を評価することが必要である。うつ病という観点からは、閉経前女性では性機能障害、閉経後女性では血管運動症状に留意すべきである。

5. Oxidative mechanisms in schizophrenia and their relationship with illness subtype and symptom profile

Ozan Pazvantoglu, Sahabettin Selek, I. Tuncer Okay, Cem Sengul, Koray Karabekiroglu, Nesrin

Dilbaz, and Özcan Erel

Departments of Psychiatry and Child and Adolescent Psychiatry, School of Medicine, Ondokuz Mayıs University, Samsun, Turkey

統合失調症における酸化機構——亜型・症状との関係について——

【目的】統合失調症患者と健常者の抗酸化・酸化能のバランス(AO-OB)を調査し、さらに亜型と症状発現プロファイルとの関係について検討した。【方法】15日間治療薬剤を抜いた統合失調症患者(n=50)と年齢性別を一致させた健常者(n=49)とについて、総抗酸化能(TAOP)と総過酸化物質レベル(TPEROX)とを測定して酸化ストレス指標(OSI)を算出した。精神症状はPANSSとBPRSとにより評価した。【結果】TAOPは統合失調症の発症年齢と有意な正の相関があり($P=0.013$)、PANSSの陰性症状スコア($P=0.008$)と、PANSSの総スコア($P<0.001$)とは負の相関関係があり、BPRSとは負の相関関係があった($P=0.001$)。OSIは発症年齢と負の相関関係($P=0.046$)、PANSSの陰性症状スコアと正の相関関係があった($P=0.015$)。年齢、性別、罹病期間、亜型、PANSSスコアからなる回帰モデルでは、亜型だけがOSIの平均値を統計学的に有意に予想するという結果であった。【結論】統合失調症を規定するパラメータのうち、発症年齢、陰性症状、亜型は酸化ストレスのレベルと関連している。

(文責：武田雅俊 PCN 編集委員長)